金子　熊夫

かねこ・くまお＝外交評論家、エネルギー戦略研究会会長、EEE会議代表。元外交官、元東海大学教授。ハーバード法科大学院卒。kaneko@eeecom.org。http://www.eeecom.org

ウエーブ　時評　2014.8.12

安全・安心・安定・安泰

長年核・原子力問題を研究してきてつくづく思うのだが、なぜ日本では原子力論議がいつもイデオロギー的、二項対立的になり、理性的、複眼的に行かないのだろうか。広島、長崎、ビキニの原体験に加えて、3・11という大災害に遭ったため、核アレルギーや原子力不信、恐怖というマイナス感情が一段と増幅された結果だろう。確かに原子力は等身大のエネルギーではなく、目に見えず、手で触われないからどうにも馴染みにくい。理解できないものを疑い、怖がるのは人間の本性だ。

そもそも100％安全なエネルギーというものは地球上に存在しないのに、原子力にはそれを要求する。まともな科学者は100％安全などとは決して言わない。だが、それでは人々は納得せず、事が前に進まないので、勢い安全を強調することになり、そこから安全神話が生まれた。その安全神話がすっかり崩れ去った今、いかにして原子力への信頼を回復するかが問われている。

「安全・安心」という言葉がいつごろから常用されるようになったか知らないが、科学的に安全だから安心して原子力を受け入れよと言われても、中々そうはいかない。原子力規制委員会も決して「安全」とは言わず、「新規制基準への適合性」と言っている。政府、行政当局もその点になると歯切れが悪い。双方が責任逃れをしているという印象を拭えない。

一般国民が納得し、原発再稼働、さらに原発促進（40年超の寿命延長、新増設、核燃料サイクル等）を容認するには、もう一つ別の角度からの説明が必要だろう。すなわち、グローバルな視点からのエネルギー安全保障の見方である。

人々は安全（safety）には敏感だが、安全保障（security）となるととんと無関心だ。発電所の安全性については、マスコミもこまめに報道するが、エネルギー安全保障となると途端に情報不足で、一般市民には理解しにくい。

目下原発ゼロの日本は、火力で90％の電気を発電しているが、その燃料である石油、天然ガス、石炭はすべて外国からの輸入で、そのため毎年4兆円近くを余分に支出している。石油のほぼ全量と天然ガスの約3割は中東からの輸入だが、中東は今激動期にあり、今後何が起こるかわからない。日本向けのタンカーはホルムズ海峡、インド洋、マラッカ海峡、南シナ海を通過するが、いつどこで何が起こるか予測できない。石油は約半年分の備蓄があるが、天然ガスは1週間分しかない。

それだけではない。石油や天然ガスは、すでに生産量がピークを過ぎており、将来供給不足になるのは必至だ（米国のシェールガスにも色々問題がある）。途上国や新興国の消費量は益々増えており、将来的には中国1国だけでも足りなくなる。そうした状況を見越して、サウジアラビアのような大産油国でさえも原発建設を計画している。日本は今のところ経済力があるから石油もガスもなんとか入手できているが将来は決して盤石ではない。しかも、日本が大量に石油、ガスを輸入し続ければ、貧乏な途上国に皺寄せが行くので、日本への批判が高まる。温暖化防止に非協力的だとの日本批判はすでに出始めている。

このような厳しい国際状況の中で、1億2700万人の日本が一定の生活水準と繁栄を維持するには、原子力による大量の良質な電気が絶対に必要だ。ベースロードとしての原子力があって初めてエネルギー供給の安定が得られ、国家・社会の安泰が確保できる。

つまり、「安全、安心、安定、安泰」がキーワードで、共通項の「安」で括れば「全心定泰」（全国民の心が定まれば国家は安泰）ということになる。この考え方を是非広めて行きたい。